

一月例会句会報



二〇二四年一月十四日、午後二時より、第一回例会が浅草の台東区民会館九階特別大会議室で行われました。前日の雪模様とは一転して寒晴の美しいお天気、青麗日和と呼びたいほどでした。会場にほど近い浅草寺や待乳山聖天に吟行された会員もあつたようです。

およそ八十人の参加でした。主宰は薄い藤色に椿を散らした和服とご母堂の遺された帯で、第一回例会とお正月にふさわしい華やぎを添えられました。他にも着物の方がちらほら。

カウントダウン句会と同様に、ジョニー平塚さんの名司会で句

会は進みます。元旦の能登半島地震の犠牲者の方たちへの黙禱から始まり、主宰挨拶、参加者の互選と続きました。

青麗の発足の句会ではありますが、マスコミの方は主宰が俳壇選者である中日新聞の谷口記者のみ。まずはうちうちで親睦を深め、俳句そのものを中心とした連衆であろうとする主宰のご意思を感じました。名前と顔をお互いに覚え、八十名が知り合うことが目的です、とご挨拶にもありました。

マイクを回して、在住の県と名前を名乗り、互選を披講します。自分の句が読まれるともちろん嬉しいのですが、声で聞いてその良さに気づく、こんな句を選び損ねていた、と気づく面白さもあります。それでも八十人の披講ですから、集中を維持するために、半ばで深呼吸の時間も取られました。

次いで互選の高得点句の発表と作者の名乗りです。高得点句の中には主宰の句もありました。

そしていよいよ主宰選の発表です。

☆一つ三十句

誤解されそうな表現に主宰の添削が入ったり、振り仮名を付ける際の注

意があったり。気の抜けない勉強の時間が続きます。

一句の解釈は文字通りに正確に、そして鑑賞は時により大胆に。わずかに言葉を入れ替えて、別な世界が見えてくるような主宰の添削例に、わくわくしました。

主宰からのこのような他力をいただいて、合力に昇華させることが期待されています。

☆☆十句

☆☆の句の中に、互選の高得点の句がありました。印象鮮明な巧い句だからこそ、もう一步繊細な表現を期待したくなる、と主宰の言葉。一句の情景を思い浮かべて、もっともふ

さわしい言葉遣いを探すことの難しさを思いました。

☆☆☆八句

☆☆☆の句について主宰より懇切な解釈と鑑賞が続きます。

日常の幸せを詠み留めた句。作者の暮しに根差した句。当たり前のようであり確かな観察の句。大胆に主観を言い切った句。そして青麗俳句会にかける期待と、創刊号を手にした喜びを詠んだ句。

主宰の言葉に導かれて、深く句を味わっていきます。選句によって句が光を得ることを、目の当りにできる時間でした。

さらに一人一人の句について講評がありました。なかなか時間が押して、語り切れない、とおっしゃっていましたが、文法の誤りは正し、平仮名と漢字の表記のイメージの違いについて語り…、経験値を惜しみなく披露されました。

中でも興味深かったのは、もう少し謎を持たせる、という言葉でした。言いたいことをすべて句に盛り込むのではなく、読み手が想像する余地を残すということではないかと思います。どこまで語るかはなかなか一人では分かりません。良き読み手の存在は句の上達に必須です。

言葉の選び方、省略の加減など、今後の句作のしるべとなるポイントが盛りだくさんの講評でした。

(岩田由美)

